■本資料のご利用にあたって（詳細は「利用条件」をご覧ください）

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

＊：著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC：著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

：パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし：上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

Ⅰ　複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
Ⅱ　上映
Ⅲ　インターネット配信等の公衆送信
Ⅳ　翻訳、編集、その他の変更
Ⅴ　本資料をもとに作成された二次的著作物についてのⅠからⅣ

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学　Todai OCW　朝日講座「知の冒険」
Copyright 2012,　菅野覚明

The University of Tokyo / Todai OCW　The Asahi Lectures “Adventures of the Mind”
Copyright 2012, Kakumyo Kanno

No. 1 Date H24. 10. 15

極楽浄土はどこにある？

1、常識的な「幸福」観

「随身の三宝」（吉田兼倶『唯一神道名法要集』 神道大系「下部神道」上）

第一は寿命也。第二は無病也。第三は福禄也。

← 『大智度論』「釈初品中戒相義」第22-1 （大正1509, P.P. 155b）

一切宝中人命第一。人為命故求財。不為財故求命。以是故。

仏説十不善道中殺罪最在初。五戒中亦最在初。

では、「寿命」「人命」とは、畢竟何であるのか？ （近代の常識では捉え切れない）

2、仏教の考える絶対の「寿命」 → 無量寿、仏寿無量

① 寿命の定義

命 = そのものがそのものであること、寿 = そのものがそのものであること（命）の継続時間

→「雷池の寿命」

② 寿命が問題となる「そのもの」 → 「自己」（人間の個体とか、他のものではない）

上の定義に立って、幸福の三要素を抽象化すると、

- 自己が十全に自己であること（寿命）
  （寿の無限、絶対）（命の絶対性）
- 自己が自己であることを妨げるものの無いこと（無病）
- 自己が十全に自己でありえたとして、その具体的なあり方（福禄）

今日風にいえば 自立、自由

仏語では 福徳、功徳

③ 寿命が問題とされる（＝幸福が追い求められる）理由

我々の現存（今ここ）は、相対因果の中にある → 自己が十全に自己たりえない

（初歩的な比喩） → （甚深の抽象レベル）

無常	死ぬ、生、滅変化	変化	常
苦	生老病死みな苦	妨げ、抵抗（墨礙）	楽
無我	それ自体として存するものはない	確実な拠点の不在	我
不浄	身は汚らわしい	純一なものはない（感覚、認識、行為）	浄

↔

⇓ [凡夫]　　⇓ [仏]

3. 凡夫と仏，発心と修行

凡夫の行為（「作」） 一貫せず、意図に反し、要するに実現不可能（不如意）
常楽我淨は 相対因果の内にはない

↓

仏の行為（「無作」） とりあえず 凡夫の行為、凡夫の世界で ないもの としてあらわれる
相対因果からの離脱（解脱）

しかし、相対因果でない行為（絶対的行為）は、空論でなく、具体性にあるもの（修行）として与えられる
現実からの空想的な離脱ではなく、現実そのものの捉え返しとしてあらわれる。

今、ここが絶対でない
とわかるとき（自己が自己に
出会うとき、無常を創するとき）
↓
皆、うすうすわかっている
死の先行了解、誰もが自覚する地点＝死

唯一無二性、かけがえのなさ

→ 発心（信） → 修行
（仏になること、十全に自己であること）

これしかない（代替）
という形で訪れる
（不可避性）

ただし、凡夫から仏への転換は、理論的には同時的（煩悩即菩提）であるが、
実践的にはもちろん段階、進歩の過程がある。

（理論的反転の典型的な形） 地獄と浄土は対になっている
地獄と極楽は、事がらとしては同じ（食べる、人を愛する etc）
同じ行為が、一方では無常～、一方では常～。
この対比、反転は、日常行為と修行とが外形上は同じでありながら、
一方が無常～、一方が常～ の内容と アナロジカル。

4. 修行の段階、深度の記述としての仏教理論

化法の四教（歴史記述、ヒストの分類などではない）

- 蔵教 ⟶ 経験的認識の範囲内で捉えられた修行
- 通教 ⟶ 上でないもの として抽象的に 〃 （空）
- 別教 ⟶ 具体的対象に即しつつ具体的対象にとらわれない修行（仮）
- 円教 ⟶ 上三つの統一、完成 （中）

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836A 7mm ruled×31 lines

蔵 → 同居穢土、同居浄土 → 天台では、いわゆる極楽はここにある
通 → 方便有余土
別 → 真実報土 → 浄土教では、ここに極楽
円 → 常寂光土

事がらとしては同じ、この現実世界
修行のありよう（心の状態）に応じた分類
（要するに修行の「位」を、世界の風景を比喩として説いている）

蔵（いわゆる小乗）の段階では、身・心の具体的な否定として修行が捉えられる
（現実の生、個体の生の範囲内）
通（大・小共通、空の認識）の段階では、身心を持たない自己の行為として仮想された修行が行われる
（関係性の総体を離脱した自己）
別（いわゆる大乗菩薩）の段階では、身心による具体的な行為がそのまま無作空として行われる

5、極楽という方便、極楽のありか

極楽浄土は、もともと初歩の段階の修行者のための、「図解」「比喩」
→ 穢土の反転として提示される修行世界
それゆえ、修行者でない人にも、「死」の瞬間の反転として理解できる。

極楽浄土は、修行行為の中に立ちあらわれる世界の一つの形
（例えば、「南無阿弥陀仏」の称名の中に）

6、浄土の図解の果てに思い描かれる「幸福」

自己が十全に自己であること ＝ 他者が十全に他者であること （無礙自在）
（自己を知る＝他者を知る＝他者に知られる / 自己を営む＝……）
同時成道、悉皆成仏、独立自立和合

寿命の無限性 ＝ 全他者、全事物（万法）、全関係の無限性 ＝ 修行の無限性
修行する者としての自己の寿命は無限。